昭和41年3月

相の谷古墳発掘調査報告書

愛媛県教育委員会

昭和41年3月

相の谷古墳発掘調査報告書

愛媛県教育委員会

序

本県の文化は約一万二千年前の上黒岩遺跡にはじまり、縄文・弥生時代を経て古墳文化は県内各地方に浸透し各地に古墳が築造されたのである。昭和三八年度実施した埋蔵文化財包蔵地調査の結果からみてもその数千基に余って存在しており、本県古代の文化・歴史等の理解に欠くことのできない埋蔵文化財を包蔵している。

近年、産業の発展にともない宅地造成、道路建設、工業誘致等による大規模な土木工事は頻激さを加え、これによって、包蔵地は破壊湮滅の危機にさらされている現状である。県としてはこれらの埋蔵文化財の保護について特に細心の配慮をもって関係機関、団体と密接な連絡のもとに保存保護にあたり、止むを得ざる場合においては記録保存をはかるため学術調査を実施して、本県文化の推移をあきらかにするとともに、その記録を後世に伝えたい考えである。

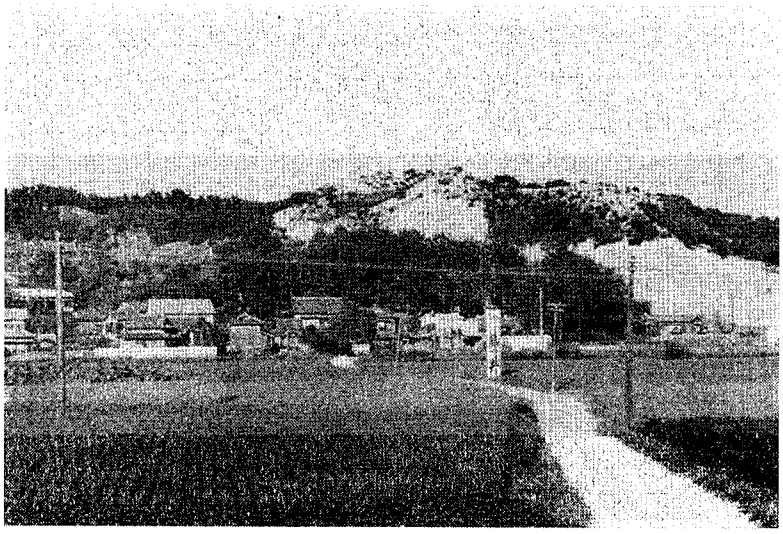
今般今治市相の谷古墳が宅地造成のため、止むを得ず緊急学術調査を実施したのであるが本書はその調査報告書である。

学術調査を実施するにあたって調査主任西田県文化財専門委員をはじめ、各調査員および調査員助手の皆さん方が二十日間の長期にわたって熱心に調査いただき、大きい成果をあげることができた。ここにその御労苦を謝すとともに、今治市教育委員会の積極的な御協力にたいしても深甚なる謝意を表するものである。

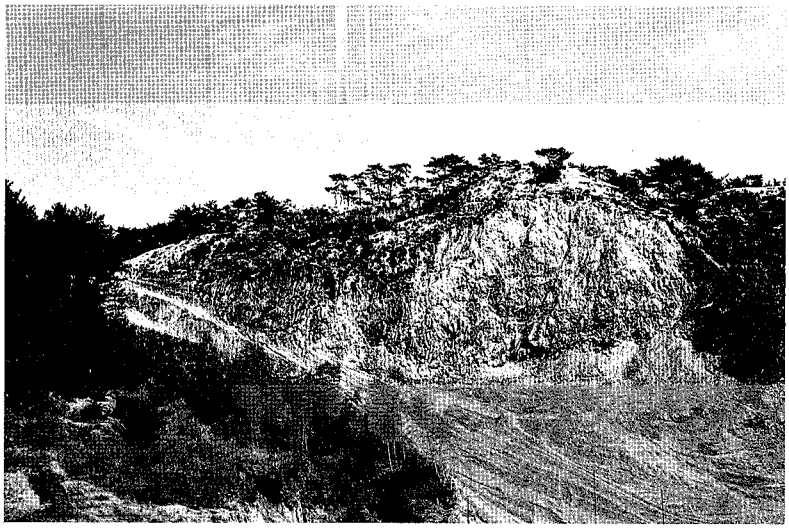
昭和四十一年三月三十日

愛媛県教育委員会社会教育課長

旅　井　理　喜　男



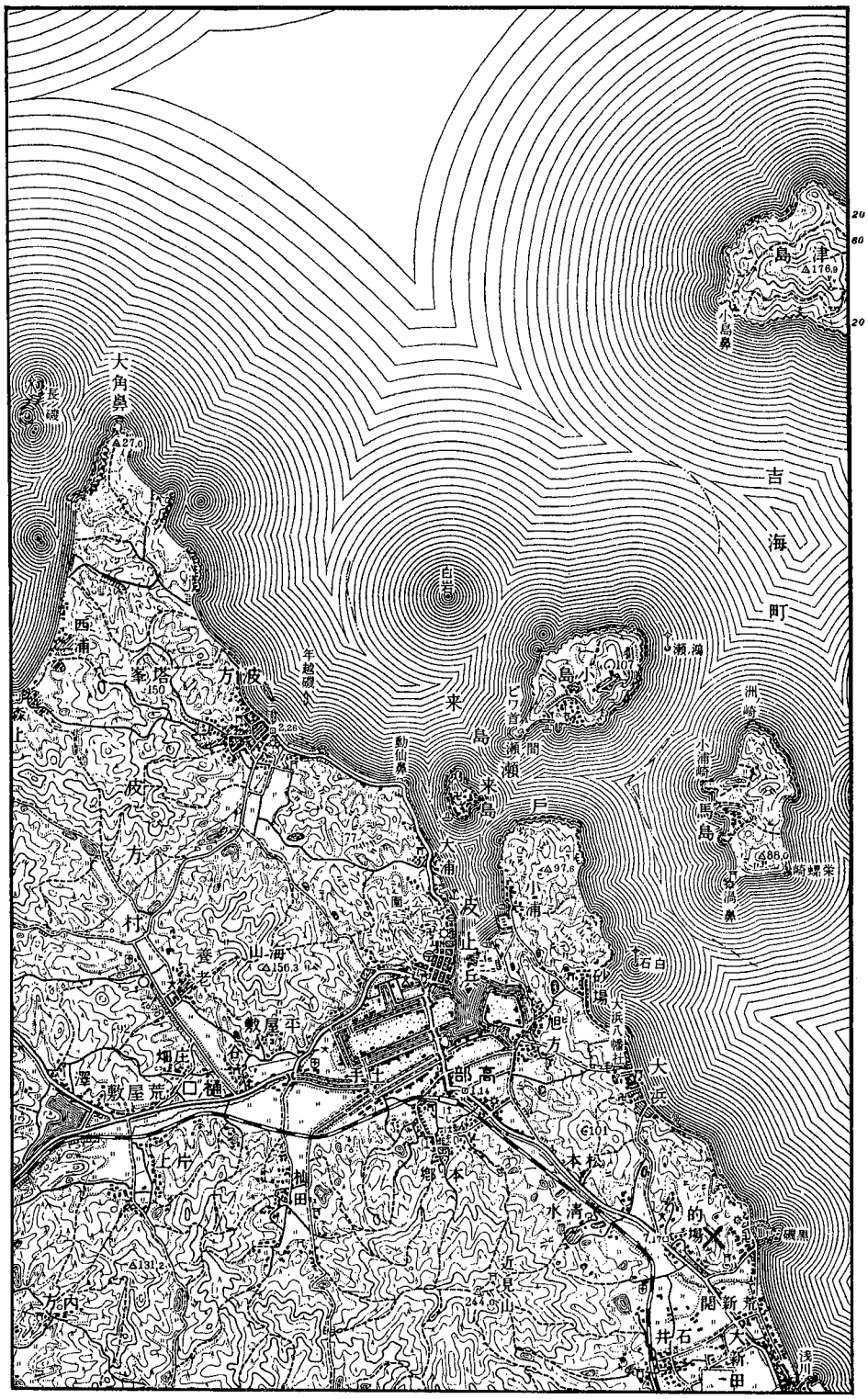
相の谷古墳群を予讃線上より望む



相の谷第一号墳全景（中央が後円部左が前方部）

位 置 及 び 地 形

×印現地（今治西部五万分一地形図）



一　調査の端緒

昨年九月東予新産業都市地域の埋蔵文化財包蔵地の調査を担当していた故松岡文一県文化財専門委員より今治市相の谷に県下における最大の規模をもつ前方後円墳が発見され、しかも現在宅地造成用の採土中にて破壊寸前にあるとの報告がなされた。県教委はただちに乗松文化係長を現地に派遣させて調査にあたる一方、今治市教委と連絡し工事主体者たる井川建設社長を招き三者で対策協議を行った。井川社長は埋蔵文化財保護について積極的な理解と協力を約され、工事を一時中止することになった。時をうつさず文部省文化財保護委員会記念物課に状況報告を行なったところ、この前方後円墳が過去において破壊されておらず、当時の姿のままであれば、国において土地買収の上指定を考慮しよう、そのために至急現地調査の上確認して欲しいとの連絡があったので、乗松係長と今治市教委村上主事が井川建設の協力を得て予察を実施した。その結果、既に明治のはじめ破壊され、蓋石は墳外に持出されていることが確認されたので本省に報告、緊急学術発掘に急きょ変更し、国庫の補助を得て実施することに決定した次第である。

二　調査団の構成

(一)　目　的

本遺跡は昨年九月井川建設による宅地造成中に発見されたもので、工事の進捗により墳丘壊滅の前に学術調査を実施しその文化的性格を究明するとともに記録保存を実施しょうとするものである。

(二)　発掘の主体

愛媛県教育委員会
今治市教育委員会

(三)　発掘調査期間

三月五日より同二十五日に至る二十一日間

(四)　調　査　団

調査団長　旅井理喜男（県社会教育課長）
〃　副団長　日浅　勝哉（今治市社会教育課長）
〃　主　任　西田　栄（県文化財専門委員）
調　査　員　正岡　健夫（〃　）
〃　野口　光敏（〃　）
〃　富田　文男（今治市文化財専門委員）
〃　三好　保治（〃　）
〃　乗松　茂（県社会教育課文化係長）
調査員助手　正岡　睦夫（愛媛大学学生）
〃　藤野　正昭（〃　）
〃　稲垣　熙（〃　）
〃　八木　武弘（〃　）
〃　伊藤進一郎（〃　）
〃　井原　忠昭（〃　）
〃　矢野　淑子（〃　）
〃　藤沢　照城（〃　）
〃　泉本　知秀（立命館大学学生）
〃　平松　康毅（国学院大学学生）
発掘調査事務局員
発掘調査事務局長　木村　保（県社会教育課長補佐）
〃　経理主任　野本　一（〃　庶務係長）
〃　現地事務主任　村上　顕三（今治市社会教育課係長）
〃　〃副主任　日野　譲（県社会教育課主事）

三　調査の経過

(一)　古墳の地域的考古的環境

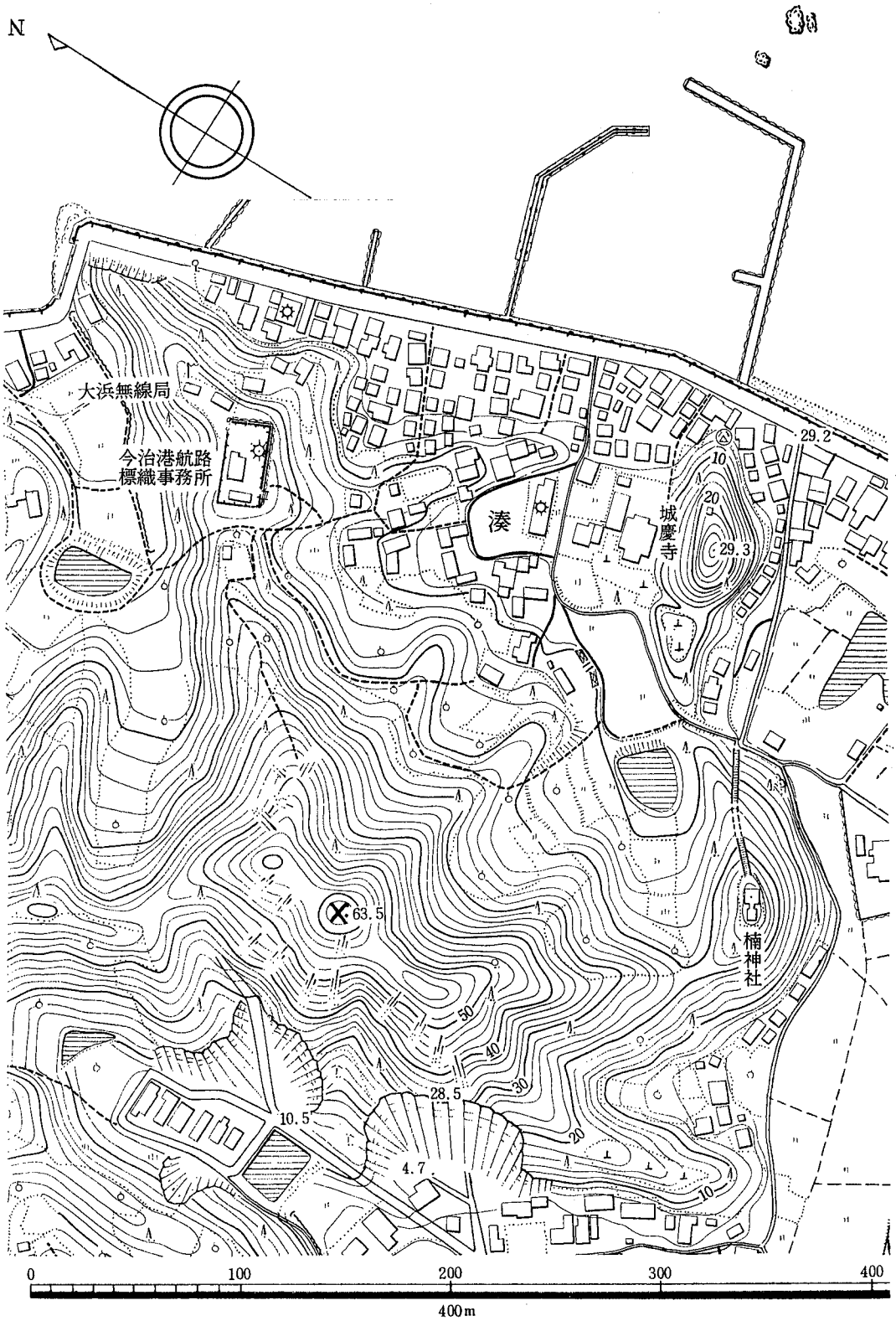
当古墳は今治市伊賀相の谷甲五九の三通称「ごもんじゃま」（所有者井川鈴雄・矢野蔓樹・赤根川ムメ子）にある前方後円墳である。

これは松山から今治への国鉄予讃線の波止浜駅を経て今治までの車中から左手に明らかに見られる極めて美しい姿をもつ自然の山丘利用の古墳である。

この古墳の存在はすでに地方識者によって感付かれていたようであるが、いまだその確認の段階に至っていなかった。昨昭和四十年新産都市の開発・宅地造成などに関連する土建工事を契機に、その切取部面からの葺石層の露出、埴輪片の発見が相次ぎ、きわめて重要な古墳としての性格が明らかになった。

その後工事中止の間、墳頂部の状況探査などが行われた結果、後円主体部の上には、かって対空標識などが設けられたり、その他の建造物もあったらしく、コンクリート工事の跡をとどめ、さらに戦前戦後には青少年によって塹壕あそびなどに恰好の場とされていたらしく、また伝えによると、この古墳東側の港海岸部落の共同井戸を明治時代に造るときこの山頂から多くの石材をとり出して運んだということもあって、内部主体が相当い損壊されていることが察せられた。

現場一般状態―周辺は愛媛県の西北端に位する高縄半島の一角を占め、東は来島海峡とその海流信号燈台を眼下に見、西は近見中学を抱く近見国立公園を控え、南は



現　地　図（原図今治市図**No.** 2，$\frac{1}{3,000}$の一部）
×印　相の谷古墳第１号の後円部

今治旧市域を一望の下におさめ、国分寺所在の桜井地域にも及び、北はかって伊賀氏の拠ったといわれる伊賀山の左に古代地形を想像させる馴合川流域の狭長な平野をながめ、右には馬島・小島などを擁する名勝波止浜公園の間を東航西走する大小様々の船を遠望しうる絶好の地である。

古墳の立地―本古墳は近見小学校を擁する的場地帯にある独立山塊の東南端にある一主峯海抜六三・五㍍を後円部とし、ほぼ北方（北一一度東）に向って前方部をもつ。全長八二㍍、墳丘前方部比高八・二六三㍍後円部一〇・五一三㍍、前方部巾四〇㍍、後円部径五〇・二八㍍ほぼ二段築成になっている。全体にわたりおよそ上下二段に葺石を約〇・五～一㍍巾にめぐらし、その間に多くのハニワ片を残存する。クビレ部と谷間には河原石からなる径約一五㌢大の栗石が過去の葺石だったことを物語るかのように流れ落ちこんでいる。（上段葺石の高さ下段より約三・六㍍上）

後円部上段の葺石層の一部は既に土木工事による地盤亀裂のため石の列を乱され、同じ後円部西端では下段基底の葺石層列も同様に乱されている。

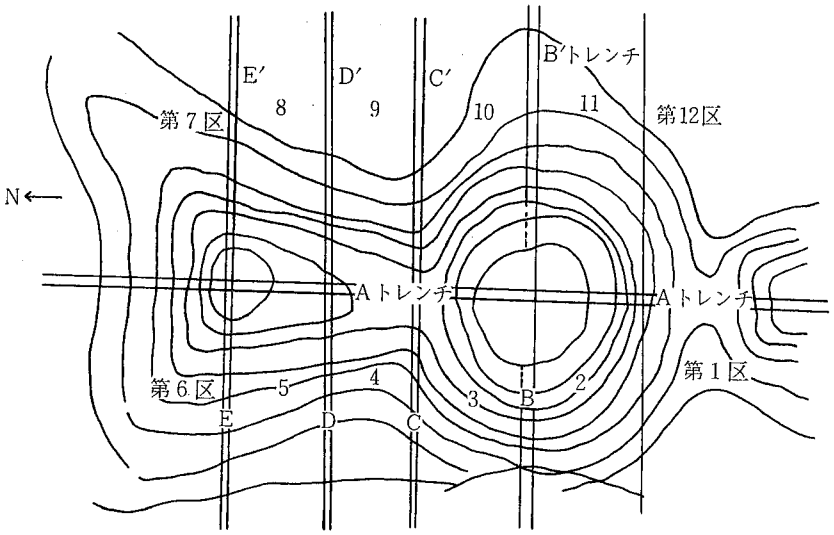
おな、この周辺には南接する続きにも、また北接する前方部の東北並に西北部にも、それぞれ墳丘らしいものや明らかな前方後円墳が存している。これらの古墳群のうちで当墳は最も際立った第一号墳として数え上げうる規模をもつものとして考えても誤りのないものであろう。（現地図及び現地古墳群見取図参照）

(二) 発掘日誌

三月五日（土）晴

午前一一時より前方部頂上において旅井団長祭主となり神事を行う。県、市関係者および調査団一同これに参列し、神体慰霊の儀式は滞りなく終った。

発掘作業における割り付け略図



旅井調査団長より学術調査を実施するにあたり、本県文化の歴史的使命をもったその意義の重大さと調査員の責任の自覚について指示があり、昼食ののち、午後は西斜面の草刈りを行なった。港区城慶寺寄泊。

三月六日（日）晴

月初からの雨天続きのため、延引していた全山の精密な実測を再開。A試掘壕（トレンチ）第一区掘下げ。

三月七日（月）雨

朝より終日雨天、前日の出土物の研究ならびに一般研修。

三月八日（火）晴

測量班の割付に従ってAトレンチ第一区の表土けずりを行い、上段と下段の葺石層を明らかに検出す。これら葺石の層中に円筒埴輪片や須恵器一片を発見する。午後前方部西南側のDトレンチの発掘開始。下段にも葺石らしきもの見出し、その位置はAトレンチの下段と同一レベルにあることを認めた。Dトレンチからは土師の杯、埴輪片など多数出土。午後今治西高生多数来援。

三月九日（水）晴

平板測量、午後後円主体部の表土はがし、異物の混入多く、過去の攪乱の著しいことを知る。この作業での割付は八等分し、壁を残して周辺から地山を確認しながら掘り進めた。見学者多数、西高生加勢。なおトレンチC、発掘で上段に崩れた葺石層とハニワ片検出。試掘壕B′で下段葺石層とハニワ片出土。

三月十日（木）晴

後円主体部、八方向の壁を残して掘り下げる。これによって土坑の構築は長さ約九㍍巾四㍍であること。この掘り込みに沿って川原石が列び、中央部には石があまり見られないので竪穴式石室であることを推定。

三月十一日（金）晴後曇

主体部、過去に掘られた形跡ある所を清掃。

土師器片、新しい磁器片、朱色のついた川原石など出土。墳頂から約一㍍五〇で朱色のついた板石小口積みの石室の一角露見。歴史学研究会学生ならびに丹原高校、今北高校生等加勢土石運び。計器の都合で実測再検。

三月十二日（土）晴

東西、南北壁による断面図を直鍋修身氏の協力で行

なう。見学者一五〇名以上。夜スライドで京都将軍山古墳、今治雉之尾古墳などを研修。丹原高、西高、北高生の協力でクビレ部の葺石層露出作業、ハニワ、土師片多数出土。

三月十三日（日）晴後曇

西条農高生の協力で第四区上段露出作業、土師の甕口縁部、同脚部、ハニワ片など出土。

クビレ部露出作業で土師の杯三個、ハニワ片多数発見。やや作業疲労?の傾向が見える。

横断壁を取除き主体部石室の全ぼうほぼ露われ、長さ約七㍍、巾一―一・一㍍の面積をもっていることがわかった。本日大学生、高校生計三〇余名加勢。石室内上部に崩れ込みの土砂取除中、鉄器片発見。

三月十四日（月）晴

石室内部作業開始、県市課長来場、鉄器片三点発見

第三区クビレ部排土作業で朝顔型ハニワ、土師杯二個出土。現場露営泉本、阿部。

三月十五日（火）曇後雨

第三区排土作業、午前一〇時雨降り始めしため石室の上に天幕張り下山。

三月十六日（水）晴風強し

Cトレンチ排土作業、朝顔型ハニワ、すり鉢片ようのもの発見。石室西側壁の底にて三角縁青銅鏡半欠発見、その他鉄剣など。

三月十七日（木）晴

石室周辺並に内部清掃、床面過去に攪乱の跡推定さる。第四区排土作業。蓋形ハニワ片?土師器続出、西高生午後晩く来援。

三月十八日（金）曇

石室内清掃、床面の遺物整理、部分写真撮影、銅鏡残存部半面のみであったが取上げる。三角縁で乳子をもつらしい。径約一三㌢、第四区二段目の排土作業、三脚付らしき土師系土器、ハニワ片など出土いつもの通り。

三月十九日（土）曇、西風強く黄塵万丈

西風強きため東側のB′、C′、D′トレンチ仕上作業、大きな葺石やハニワ出土、石室の方はプラン実測、遺物取上げ、斧並に新出の刀子も。

三月二十日（日）晴風強し

丹原高校生十名来援、第三、四区排土作業午後強風のため、Eトレンチ割付け、東側山裾の壊廃横穴式に近い古墳の覆土取除け清掃、須恵器坩三、フタ二、杯一、玉八を取上げる。（見取図参照1の1号）

三月二十一日（月）晴

第三、四区土師実測、第四区脚部付土師出土、第四区根石発見、横穴式無羨道古墳の実測、竪穴石室内割付け東壁一部実測。

三月二十二日（火）曇時々雨

午前中断続雨のため一人だけ現場視察。午後全員作業、第四区上段平坦部整理、朝顔型ハニワ片、上段葺石列明確化。

三月二十三日（水）曇風強く作業困難

前日の作業継続、第二段目排土、出土土器写真撮影、実測、石室の側壁実測。

三月二十四日（木）晴強風

第四区作業継続、第一段平坦部葺石実測、午后下段の根石明確化、遺物県教委へ発送

三月二十五日（金）晴

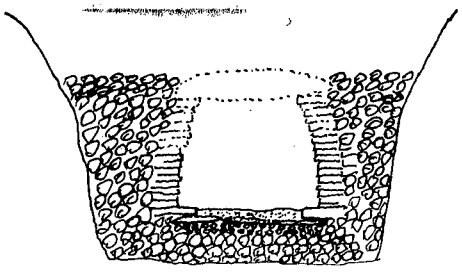
前日の作業継続第二段の排土作業松根取除で手間どる。鋸歯状文つきと竹管文つきのハニワ片各一出土。（第四区下段）午前県事務所井出氏、夕、市関係者来場して懇談会、大新田合同宿舎の最終夜。

四　調査の概要

(一)、遺　跡

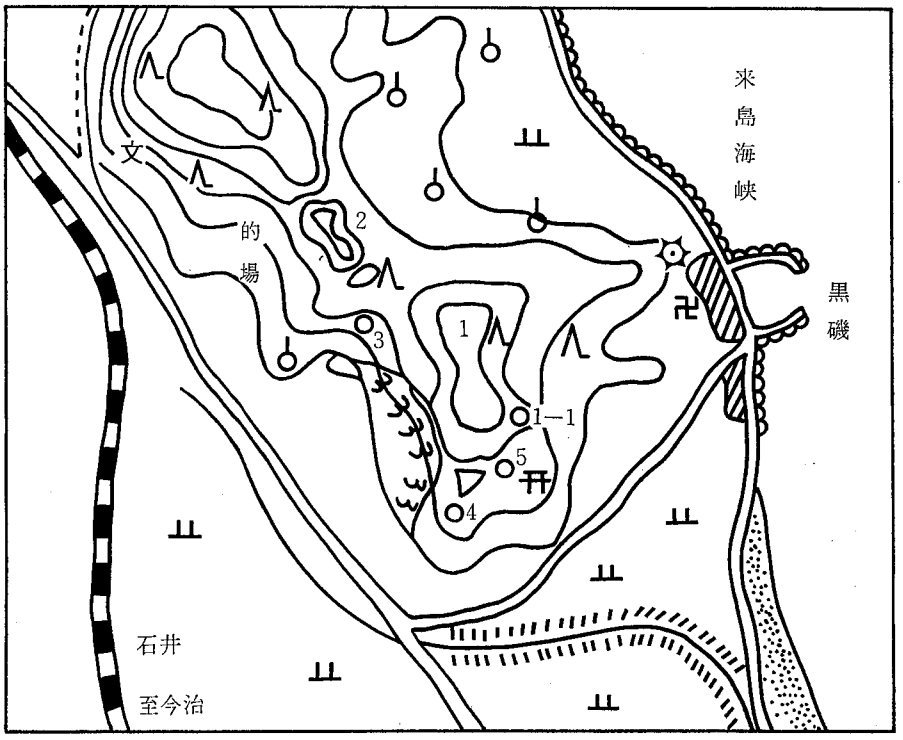
本前方後円墳の主要事項に関し、その外形は既述の通り、また内部構造の状況などについては別図（図版）参照。石室長軸は墳丘主軸に平行。内法七・一×一・〇八米

竪穴式石室内部の築成におもに用いられた小口積の板石は輝石安山岩であり、当市には産せず、隣接の玉川町竜岡地区に見られる種類に属する。石室天井は表土より〇・八～一・〇㍍下にあったかと思われるが、天井の蓋石は全くなく、石室の側壁も六～七割は崩されて板石を失い、その高さは正確には分らない。ただ現存している底面から一㍍以上あり、その上に多少持送式にせり出していたものかと考えられる。また床面も板石を敷いていた形跡もあるが、これもかく乱されて把握しがたい。過去に掘りかえされた石室北端（写真参照）にて知られるように、掘下げられた土抗（墓抗）底面に約一五㌢大の栗石を敷き、その上に玉砂利の大小のものを配し、その上に板石を置き、これを粘土で覆っている。その形は崩れているが、この上に木棺をのせたかとみられる。



相の谷後円部竪穴式石室基底部断面型式復原想定図

遺物としての副



相の谷古墳群見取図（数字は古墳番号）

葬品はほとんど長軸側壁の台石の内部にせり出している部分の上に配列されていたようである。しかしこれもかく乱されて壁体の混入土砂礫中から出土するものもある有様で、その原位置は確かなことはいいがたいほどであった。

(二) 出土遺物

A 外周より出土したもの

○埴輪破片　多数未整理なるも葺石層中に

一、円筒型ハニワと思われるもの

二、朝顔形ハニワと思われるもの（図版参照）

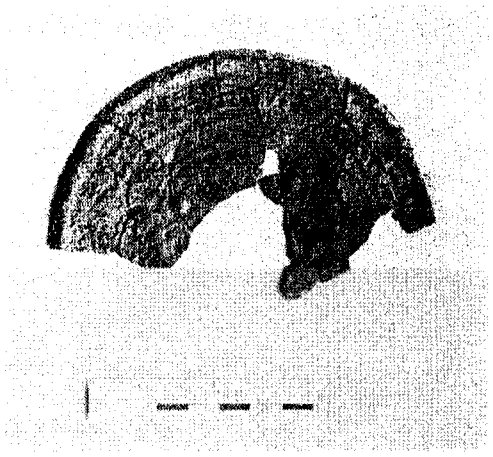
その他種種ある見込、鋸歯文や竹管文ある破片も出土

○土器片、クビレ部及び前方部への西側日当りよき部分の上設平面に

一、山杯形の土師器（底部は手づくね）

二、甕形の三脚付きの土師系土器（図版参照）

三、後円部その他で須恵器片二点



B 後円部竪穴式石室出土遺物

一、三角縁（高さ五糎、巾八糎）の青銅鏡、（径一三糎）外区の獣文帯?についで鋸歯状文、櫛状文などが順に見えるが内区の神獣などさだかでない。神像その他獣形もある様子（挿図参照）

二、鉄　剣　四?

三、鉄　直　刀　三?

四、小　刀　子　四（鉄のみ二を含む?）

五、鉄　斧　二（袋付斧一を含む）

六、やりがんな　二?

六、その他の鉄器片多数。計測数値後出（写真参照）

（附）

なお本前方後円墳の後円部の山丘の東裾にあった壊廃古墳（天井石も側壁の上半も失っているもの）の清掃整理も行った。これは別図の通りで羨道も未設の横穴形式のものである。（二三五×一〇五糎）北北東正面、この遺物も参考までにかかげておく。（一の一号古墳）

C 東山麓付設小古墳出土遺物

一、須恵器

イ、坩　三

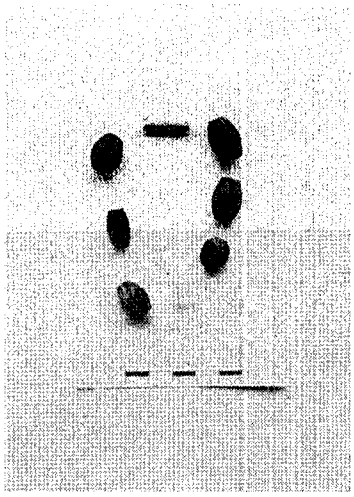
ロ、同　蓋　一

ハ、杯　一

ニ、同　蓋　一

（別図参照）

二、玉　類（挿図参照）



主要遺物計測一覧（単位糎）但し鏡は除外

遺物名		現存長	身巾	厚さ	把長	把巾	把厚	備考
鉄剣	b a	四・一～三・二	二・五～二・二	一・〇～〇・八	一・〇～〇・六	一・八～二・〇	〇・八～〇・七	全長推定 四三?鋒先欠 三五?把半折
大刀	b a	二八・五～三五・五	二・五～二・四八	〇・七～一・〇	二・五～?	二・五～?	〇・四～?	五〇～六〇?三折片 六〇～七〇?二折片
刀子	d c b a	二一・〇～一七・六〇・五	三・〇～一・七・〇～一・五	一・一～一・三～一・〇～一・五～〇・八	一・一～一・七～三・四～四・五	〇・八～二・七～一・五～一・〇～一・〇	〇・五～二・〇～〇・九～〇・八	―把大部欠 ―把・刃共に折損 ―或はノミ形利器? ―鉄ノミ
鉄斧	袋付a	一八・五～二二・五	六・〇～六・〇	一・三	―袋外径二・七～三・七、内径一・七～三・〇、袋穴長さ約五糎			
やりがんな	扁平丸形	二〇・五～七・五	〇・五～〇・七 径〇・三	〇・二五				

イ、丸　　玉　一　高さ七・五糎、最大径八糎
ロ、切　子　玉　五　長さ一・六～一・九糎、周径一・一～一・三
ハ、平　　玉　一　長さ一・四糎、巾一・三糎、厚さ八糎
ニ、管　　玉　一　長さ二糎、径七糎、孔径二糎

○丸玉は石英または石英をとかしたガラス質製品
○切子玉は六方錐を底面で切ったもの、砂質粘板岩ホルンフェルスと珪質粘板岩ホルンフェルスとから成り、いわゆる那智黒に類し、山陽道山口、広島、岡山県にある岩石、特に山口県に多く柳井などに見られるものに似る？
○平玉はきわめて優美な形。石質は前者と同一
○管玉　自然の岩石とすれば珪質緑色凝灰岩系のものであろう。大陸で入手のものか、或は山陰などに求められたものか？

㈢　結　　語

緊急調査を年度末の忙しい時に行ったことと、前後の天候、山上の慮外に強い風当りなどのため、作業は要員の関係ともからんでかなり手間どった。

しかし県市当局の努力ならびに地方関係者の好意ある関心と御援助で、少くとも複雑な主体である後円部をほぼ調査することが出来た。

遺物の整理検討は後日相当の日時を要するであろうことは一般の方々には御理解が頭いにくいかもしれないけれど、専門の各位は十分御承知かと思う。

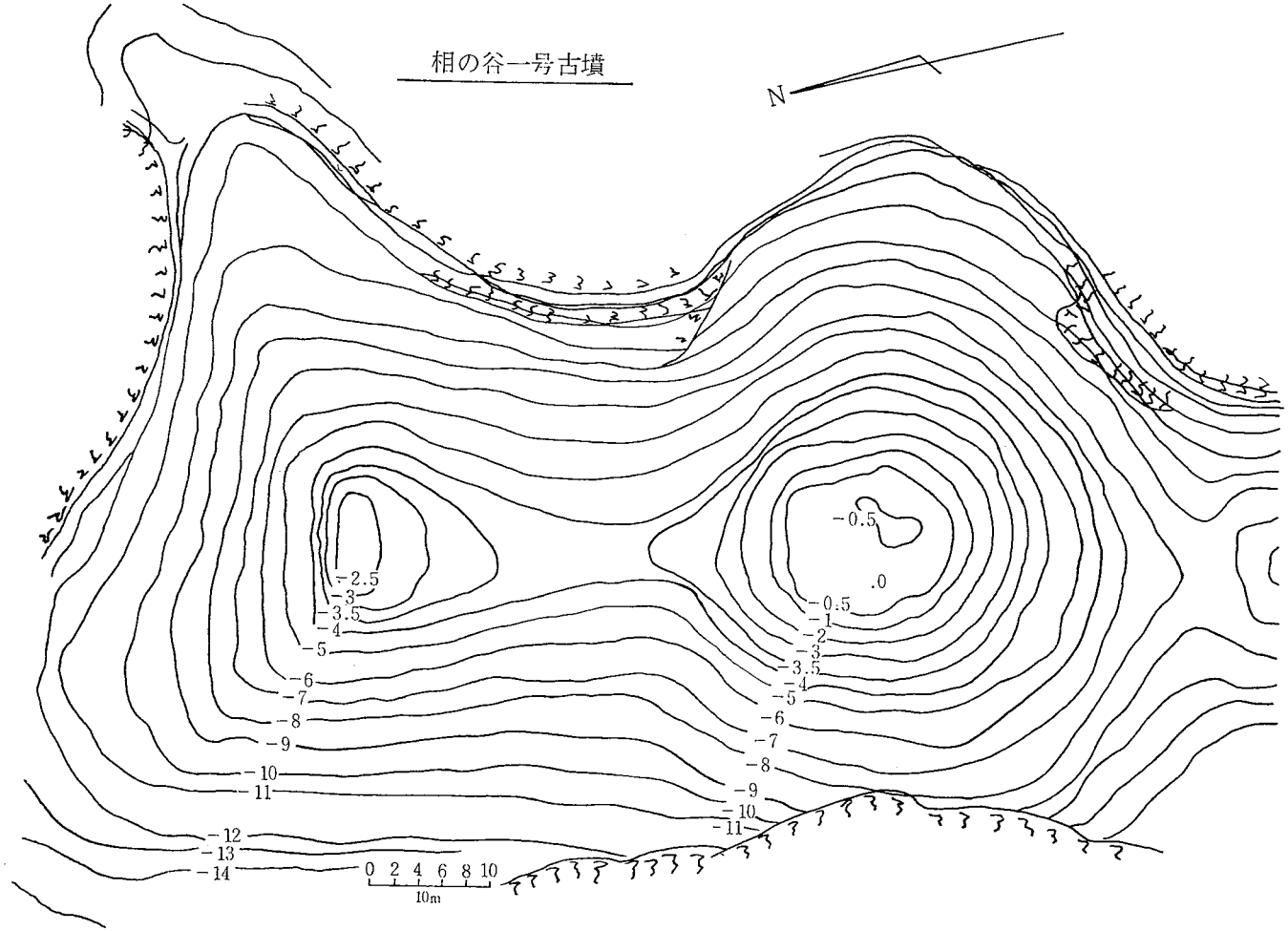
従って、いまここで直ちに結論など出る筈もなく、ことに前方部のほとんどは未調査で次年度に第二次の作業として考えられていることを思えば当然である。

けれども巷間、何らかの中間的報告を求められるとすれば、本前方後円墳はその主体部の石室構造に当地方稀に見る特色をもち、三角縁神獣鏡―恐らく彷製―を出し、また調った葺石層をもち二段築成によるその段上には多くの土師器やハニワ片を残している。これらから当古墳は古墳時代を前後期に分ち、さらにこのおのおのを三期に再分して六期とする見方からすれば、古墳前期の第二～三期ごろに相当するかなり重要な――恐らく県下でも余り例のない意義をもつものと考えられるがその実年代はまだ明確ではない。しいて求められれば、一五〇〇年以上前で、あるいは四世紀末に繰入れて考える人もあるかもしれないと答える以上には出ない。それらは全体の発掘完了後にほぼ明らかにされるであろうし、またこの史的関連も改めて考察さるべき重要なものを含んでいると思われる。

なお、当初陪冢的（そばつか）なものとして見られていた前記の東山麓の壊廃古墳も出土品の研究未完で何ともいえない。しかし、仮りに推定的年代を挙げれば六世紀前半ごろとでもいわれるであろうか。

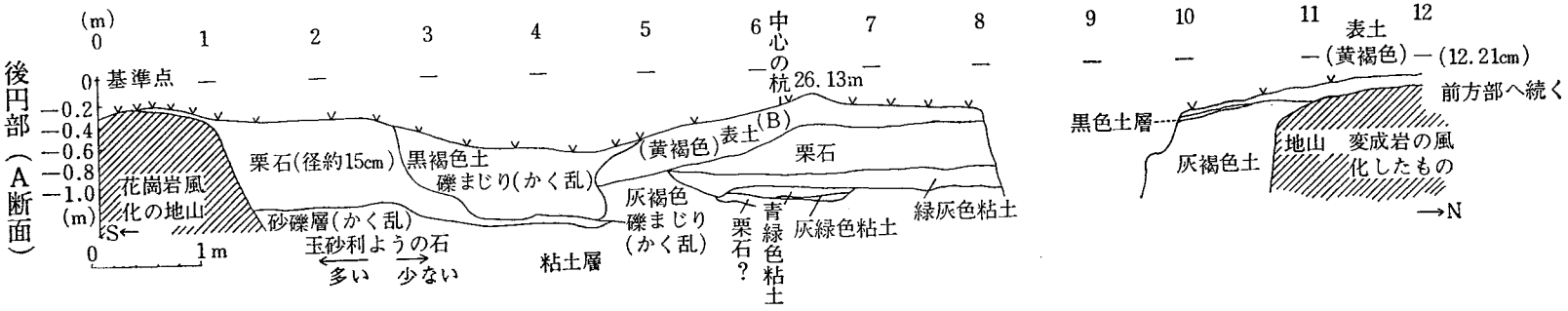
今後の調査の推進の完全を期して、大方諸賢のこの度の御助力に深謝の意を表すると共に、この完遂まで変らぬ御関心とこの種文化遺産の保護顕彰に倍大の御援助をお願して筆をおく。（一九六六、三、三〇）

相の谷1号墳実測図

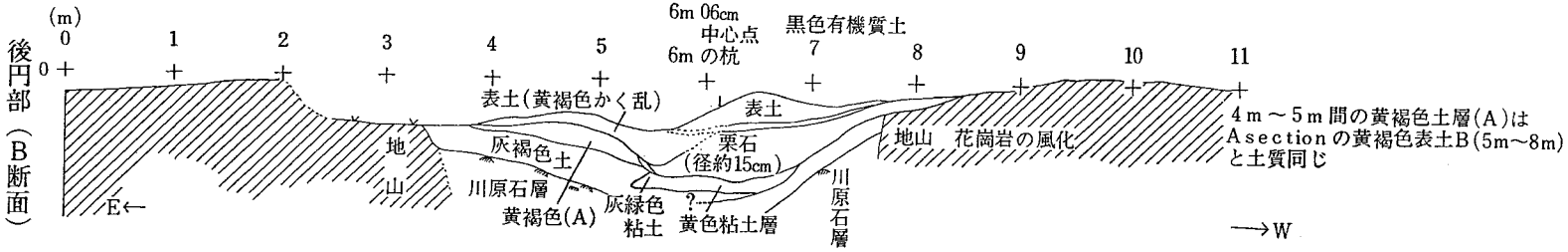

相の谷一号古墳
N
-2.5
-3
-3.5
-4
-5
-6
-7
-8
-9
-10
-11
-12
-13
-14
-0.5
.0
-0.5
-1
-2
-3
-3.5
-4
-5
-6
-7
-8
-9
-10
-11
0 2 4 6 8 10
10m

後円部断面図

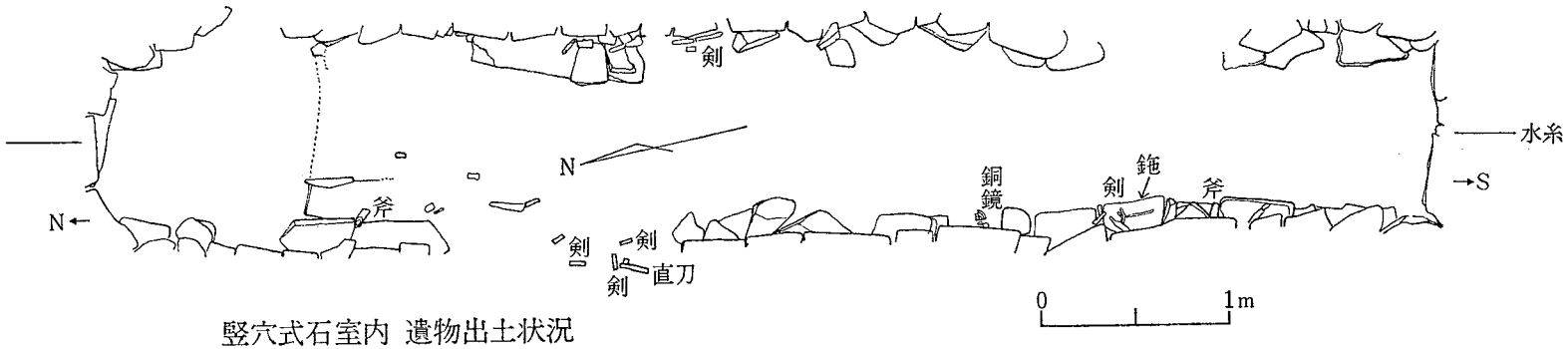
南　北


後円部（A断面）
(m)
0
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
基準点
中心の杭
26.13m
表土
(黄褐色)
(12.21cm)
前方部へ続く
0
−0.2
−0.4
−0.6
−0.8
−1.0
(m)
S←
0
1m
花崗岩風化の地山
栗石(径約15cm)
黒褐色土
礫まじり(かく乱)
砂礫層(かく乱)
玉砂利ようの石
多い
少ない
粘土層
(黄褐色)
表土
(B)
栗石
灰褐色
礫まじり
(かく乱)
栗石？
青緑色粘土
灰緑色粘土
緑灰色粘土
黒色土層
灰褐色土
地山
変成岩の風化したもの
→N

東　西

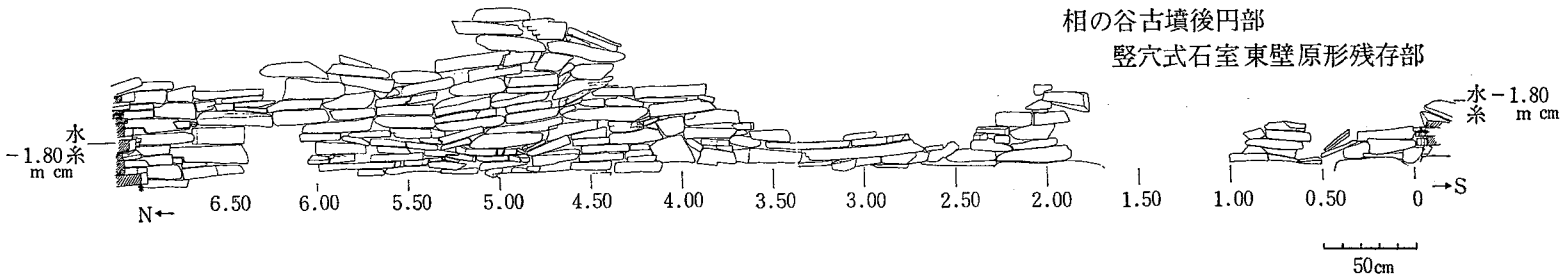

後円部（B断面）
(m)
0
1
2
3
4
5
6m 06cm
中心点
6m の杭
黒色有機質土
7
8
9
10
11
E←
地山
表土(黄褐色かく乱)
表土
灰褐色土
川原石層
黄褐色(A)
灰緑色粘土
?
黄色粘土層
栗石
(径約15cm)
川原石層
地山　花崗岩の風化
4m～5m間の黄褐色土層(A)は
Asectionの黄褐色表土B(5m～8m)
と土質同じ
→W

後円部の石室



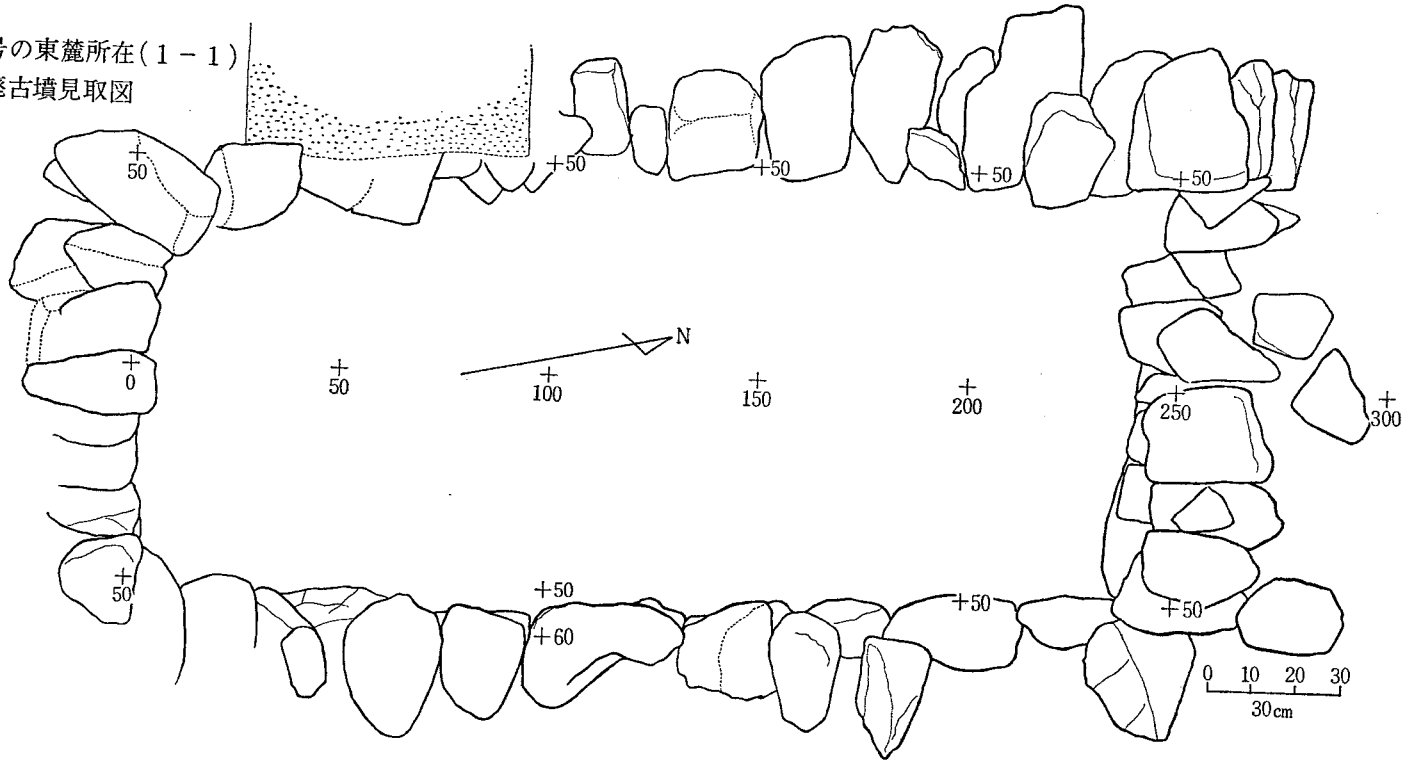
竪穴式石室内 遺物出土状況

相の谷古墳後円部
竪穴式石室東壁原形残存部

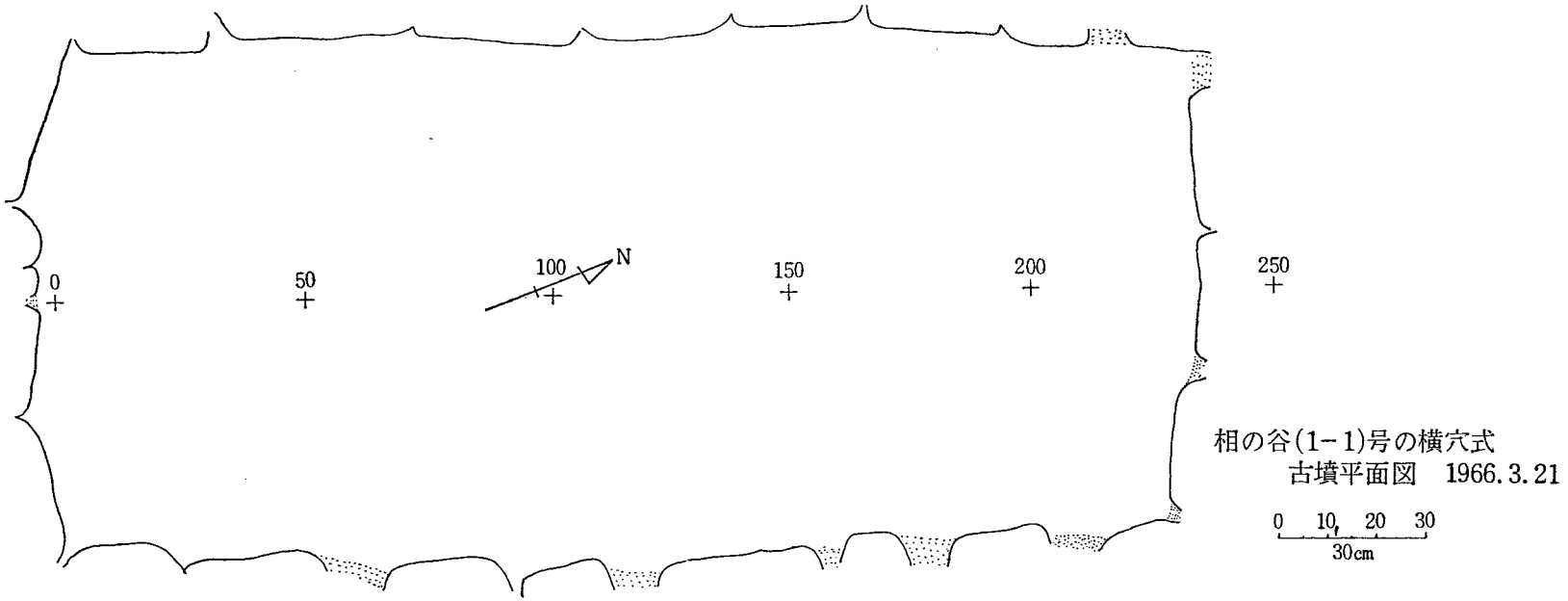


相の谷1—1号墳見取図

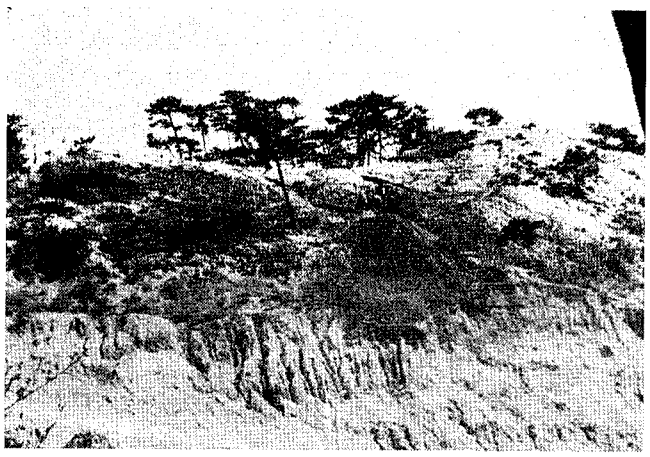
相の谷第一号の東麓所在（1－1）
壊廃古墳見取図



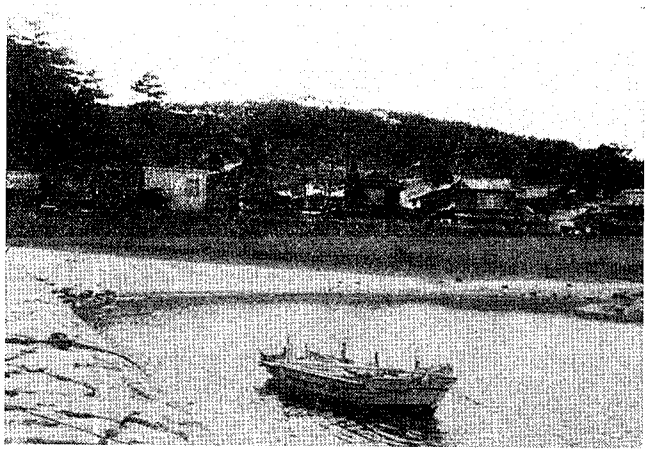
相の谷1—1号墳平面図



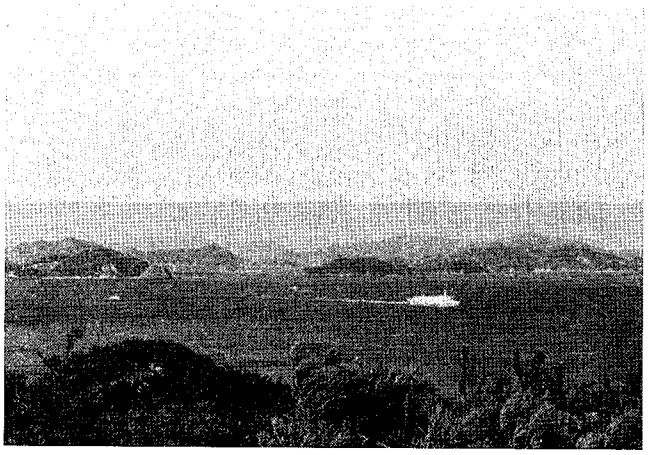
相の谷(1−1)号の横穴式
古墳平面図　1966.3.21



西前方より見た全形（作業中）

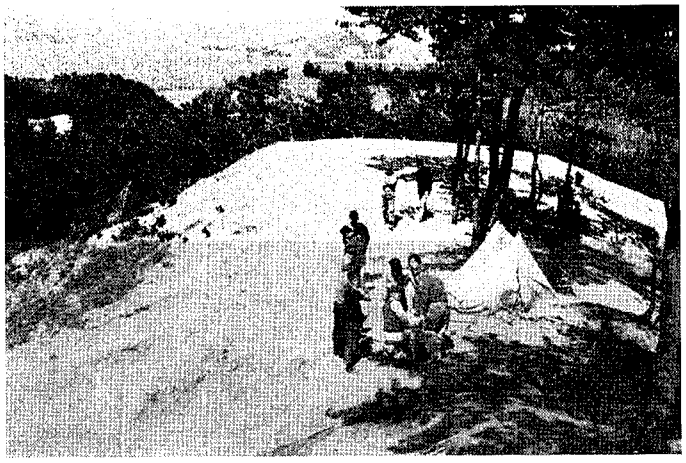


東方から見た前方後円墳（中央高所が後円部、その右が前方部）



墳頂より内海を望む（来島瀬戸）

後　円　頂　部（作業前）

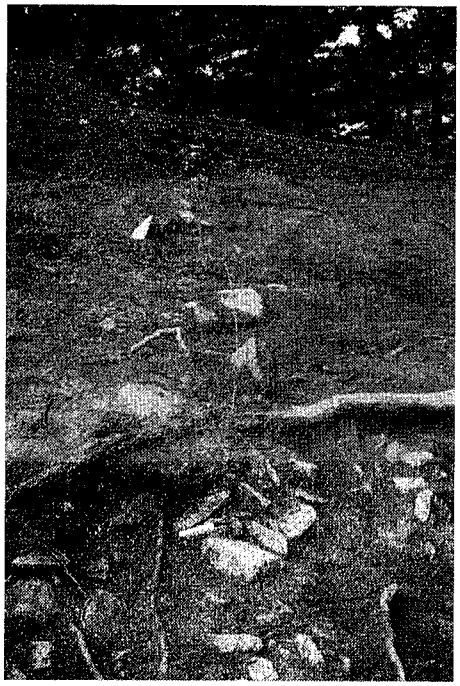


後円頂より前方部を見る

前方部より後円部を見る

①

②



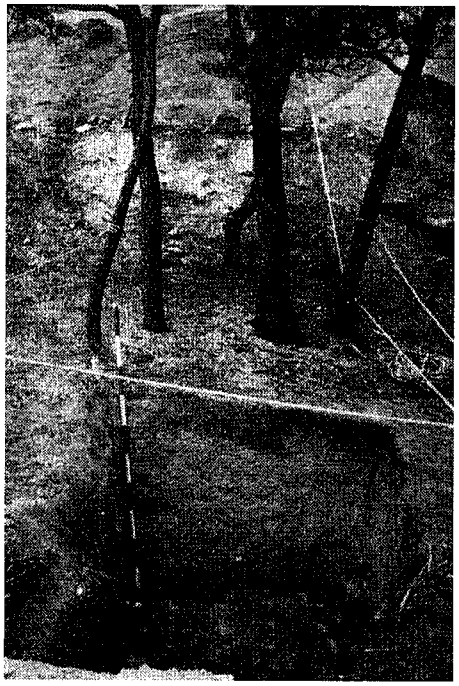
西南より見る

後円部南斜面の葺石

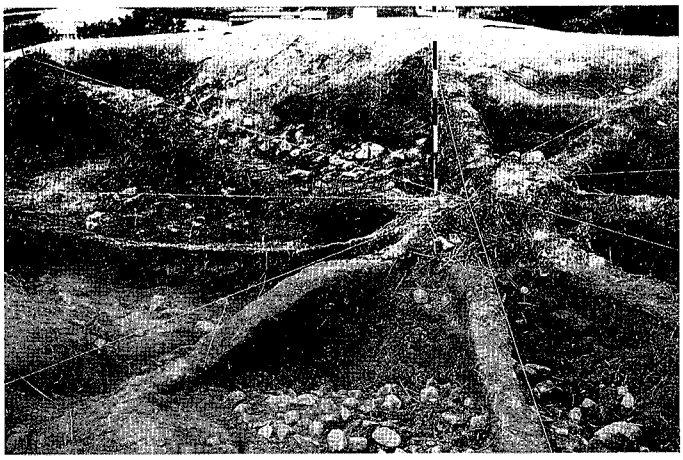
①上段　②上段　③上段と下段

（井戸堀の中）

③

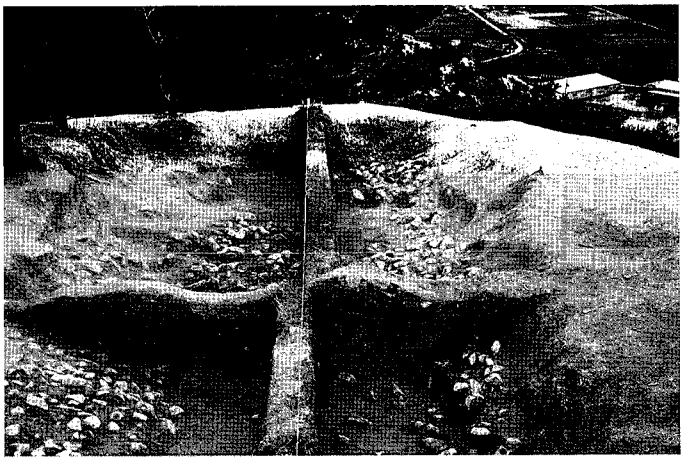


後円部の土抗石室探査



北より

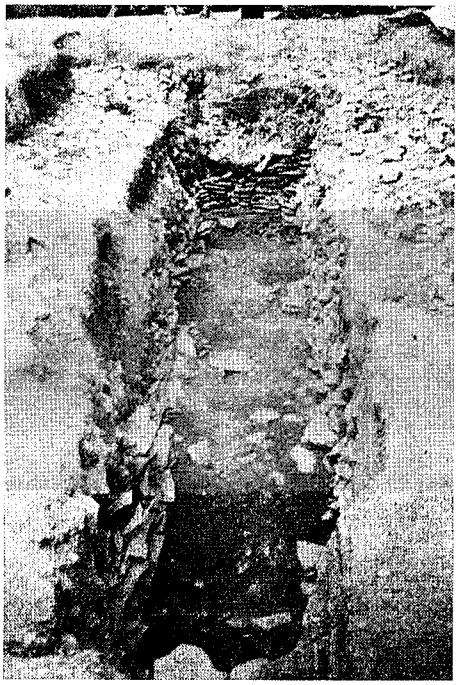
南より



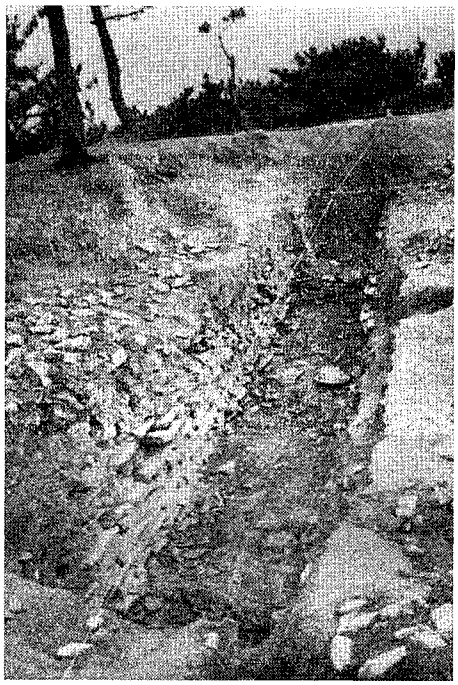
北より写す

覆土横断面

攪乱土層とそれを除いた石室内の状況

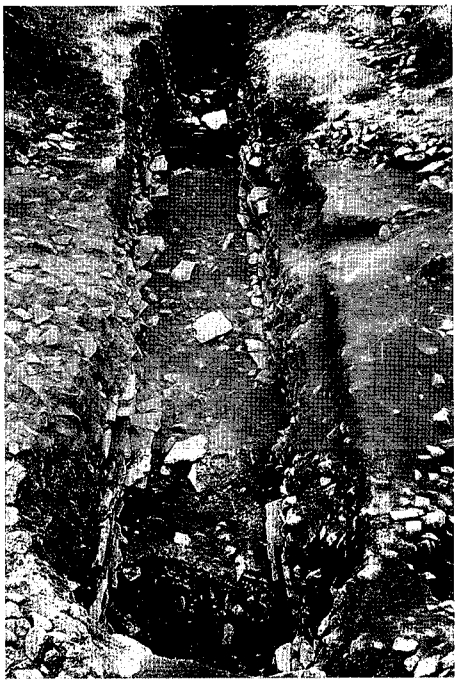


後円南端より竪穴を見る



後円北端より

後円部石室北端の壁（左右両端の角石は斜に積上ぐ）



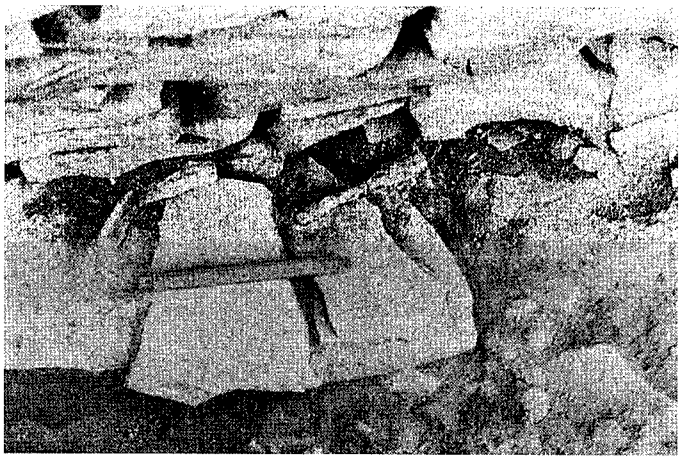
石室北端の床面攪乱部断面（手前）

（同じ断面）拡大

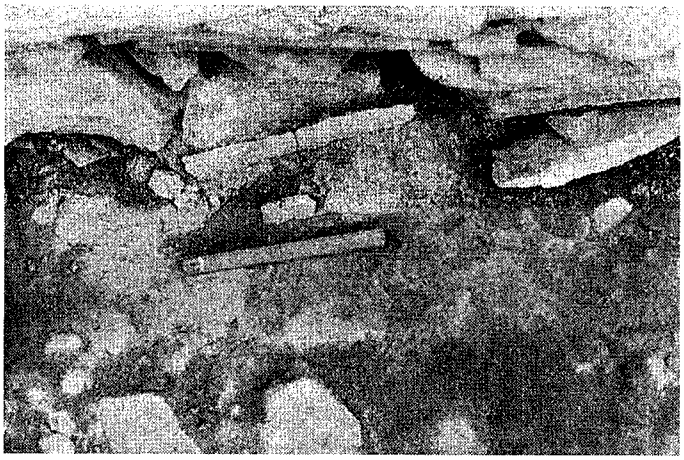
石室内鉄器類出土状況

（東壁下端北から南へ）

比較的良く残った東壁の一部

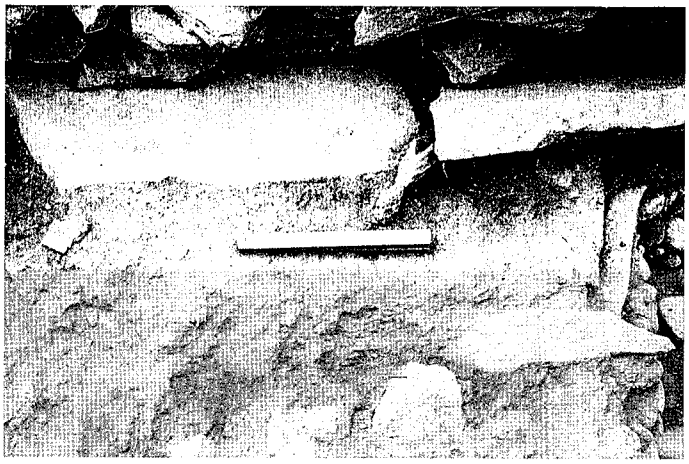


右刀と左剣

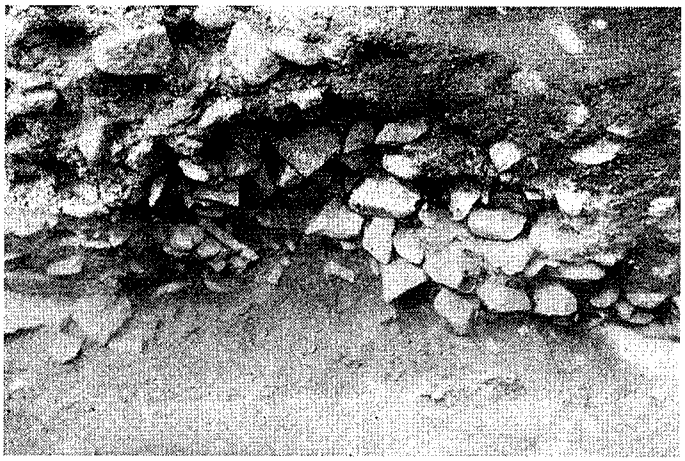


鉄剣出土

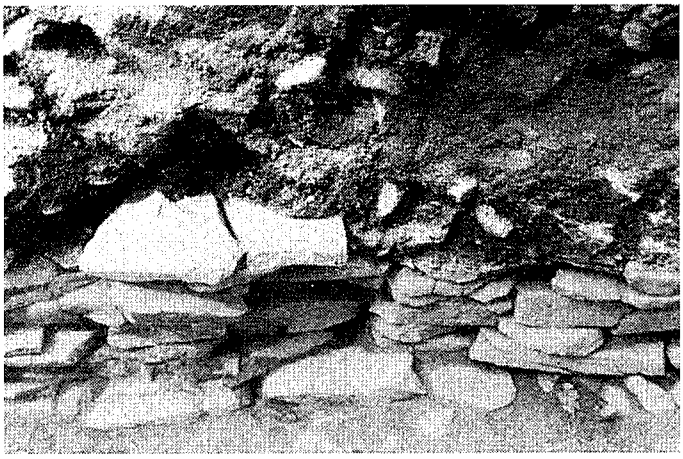
西壁沿いに北から南に



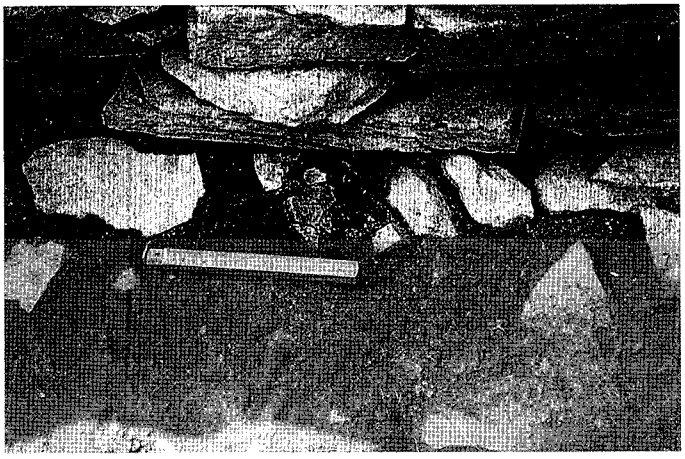
袋付鉄斧



過去に攪乱孔された石室西側壁（刀の残欠が見える）

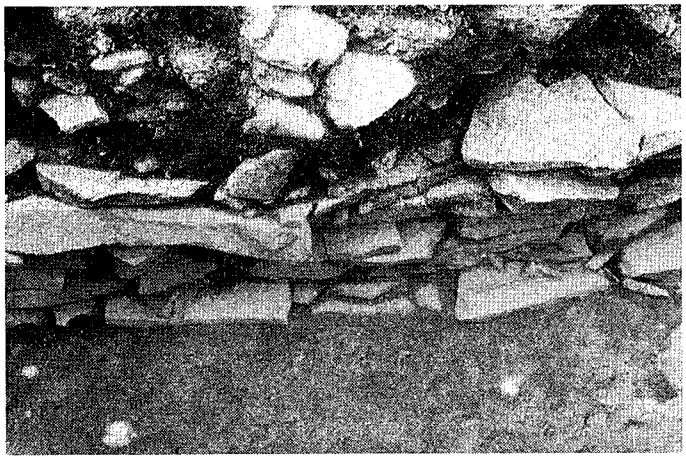


石室西壁下端に見える副葬品

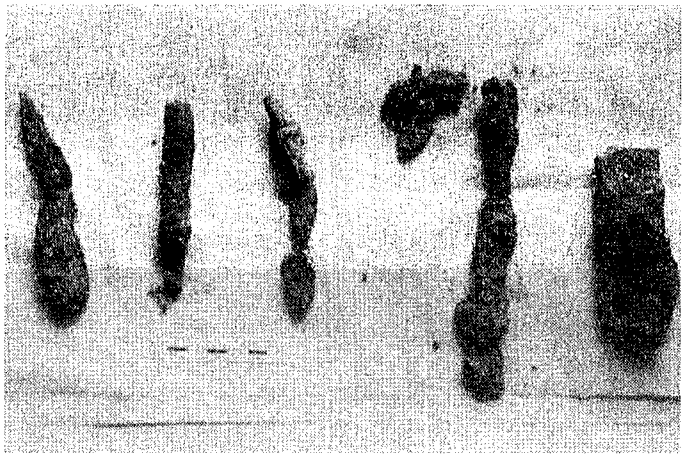


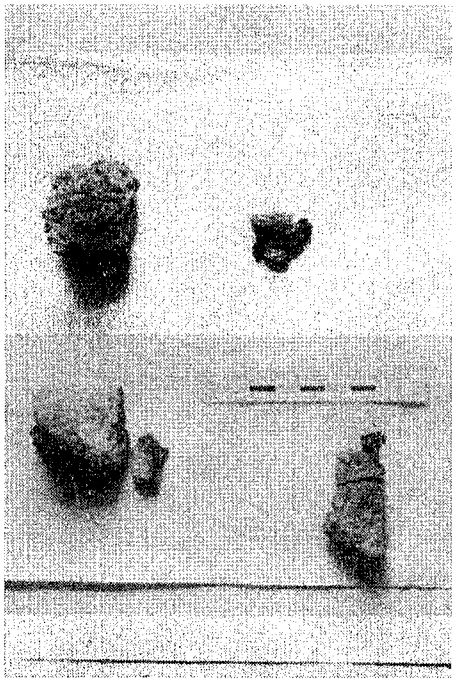
（同上拡大）

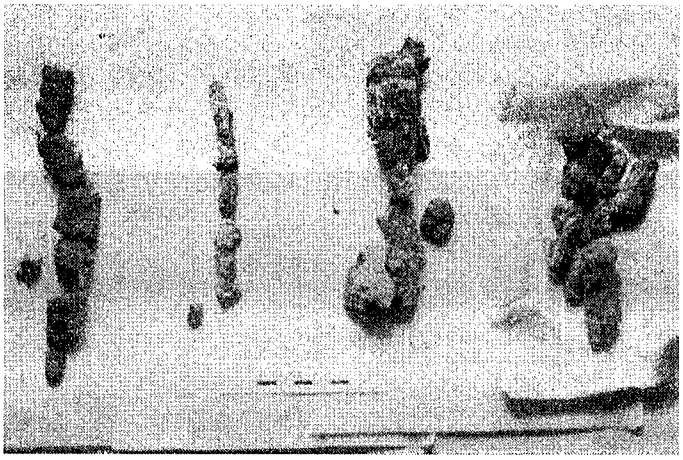
青　銅　鏡



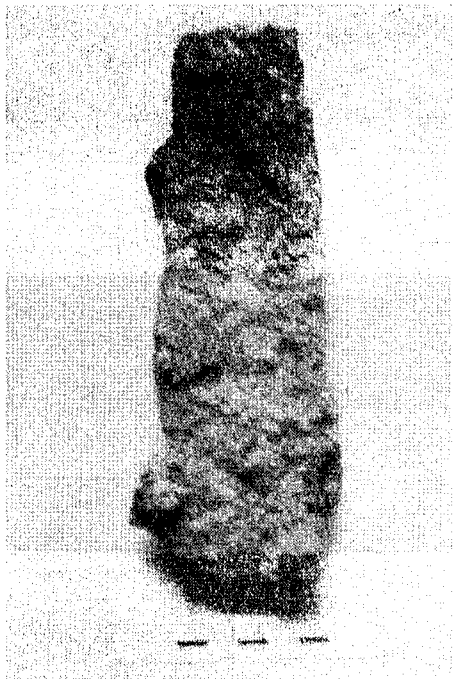
鉄　器　類



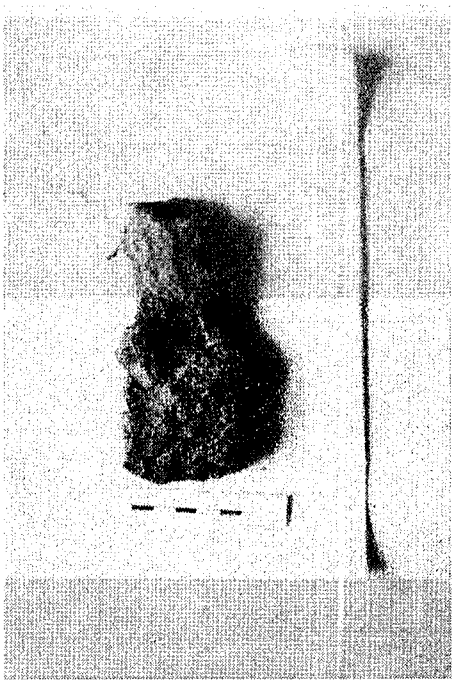




石室出土の鉄器片（未整理のまま）

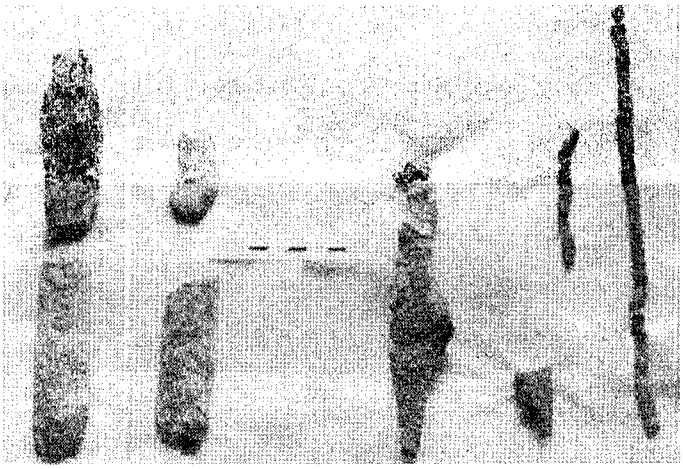


大形鉄斧



袋付鉄斧

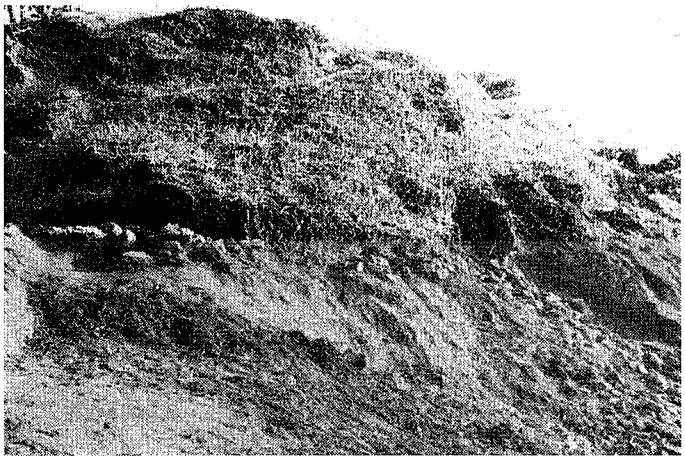
（出土のまま）



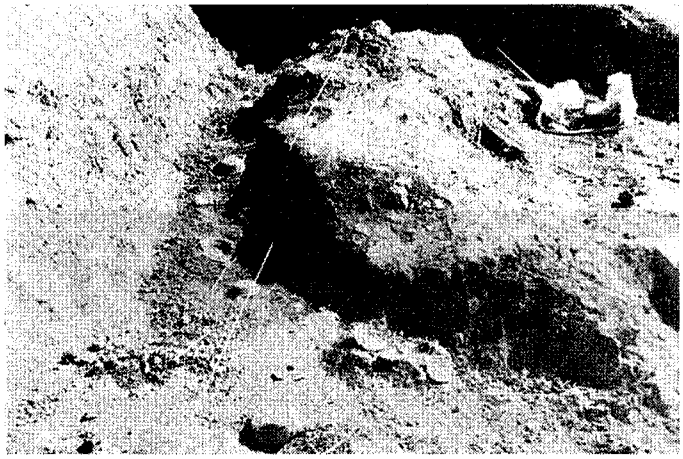
鉄剣と小利器

後円部～前方部西斜面

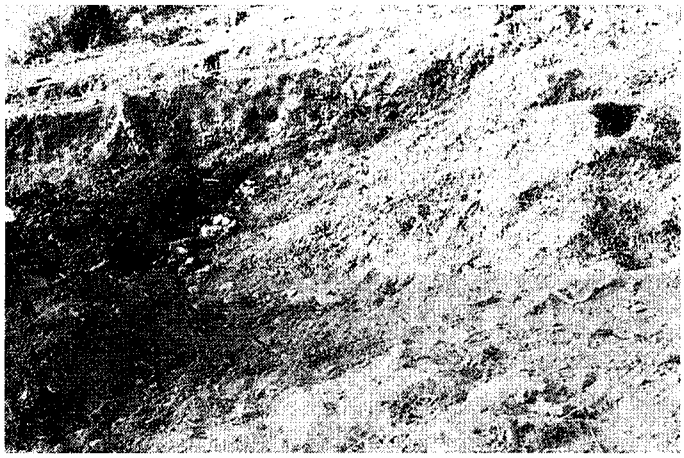
後円部排土作業



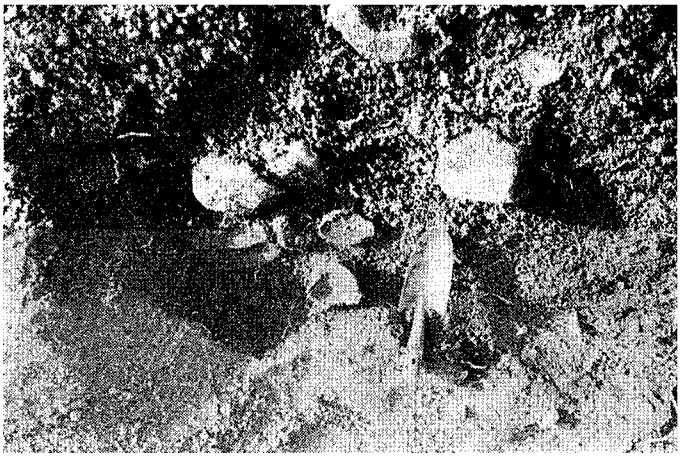
流れおちた後円の葺石？

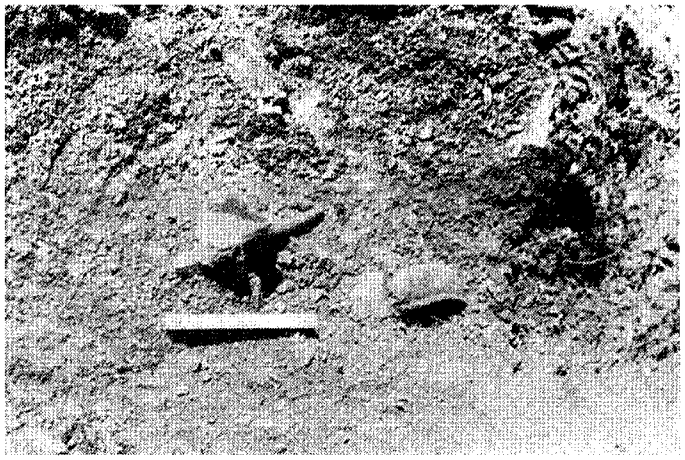


土器出土（西側くびれ部上段）



クビレ部～前方部西斜面の土器片出土状況

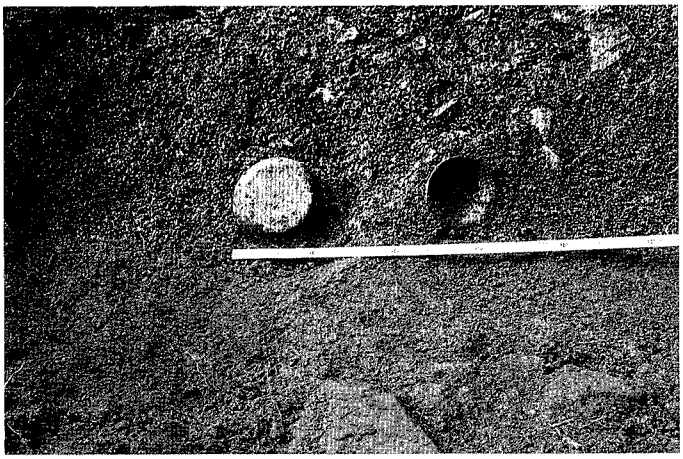




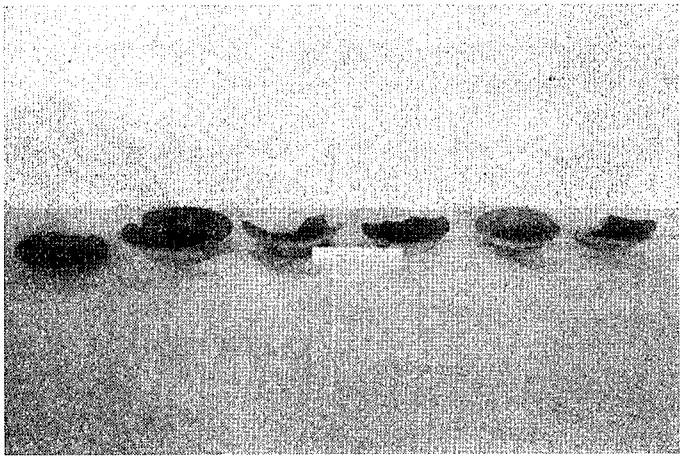
三脚付土師器

後円部北西斜面出土

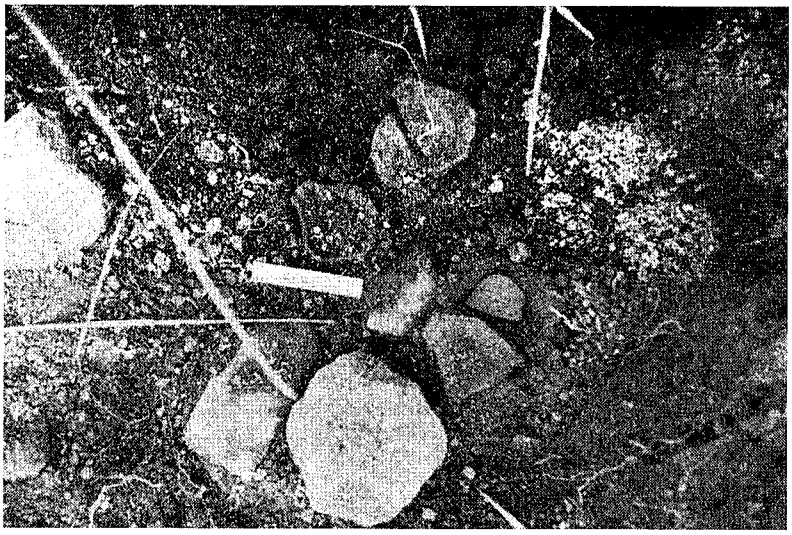
ハニワ片



土師器（クビレ部西側）

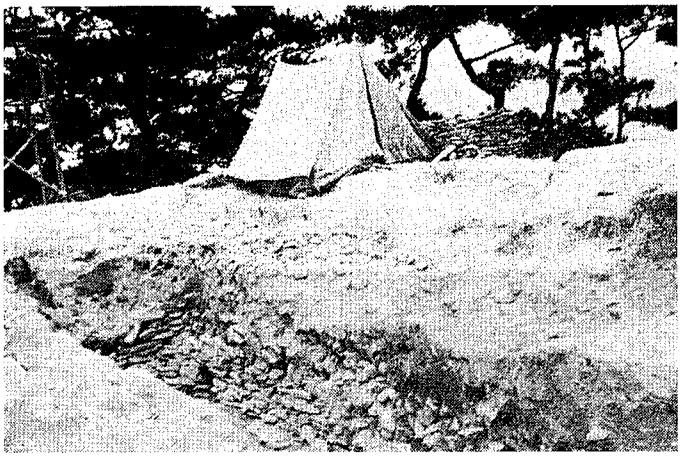


土師器（同所）

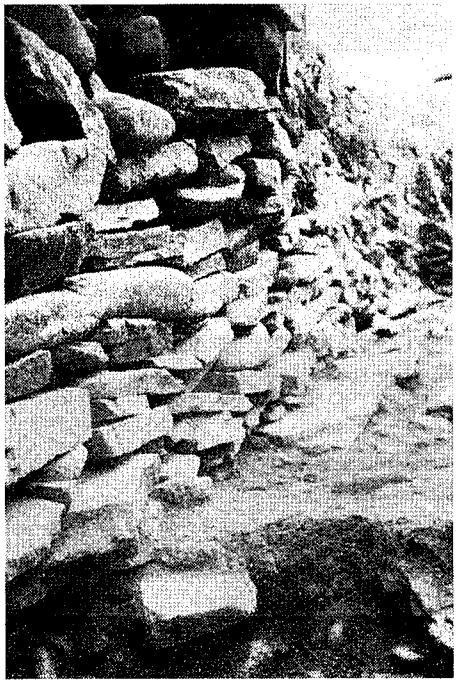


前方部西側面出土の土器片

二段築成の葺石列（手前下段）



露営張番

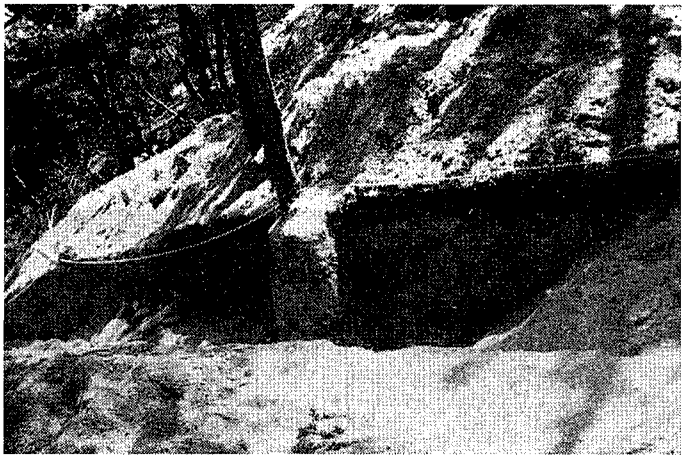


石室東壁

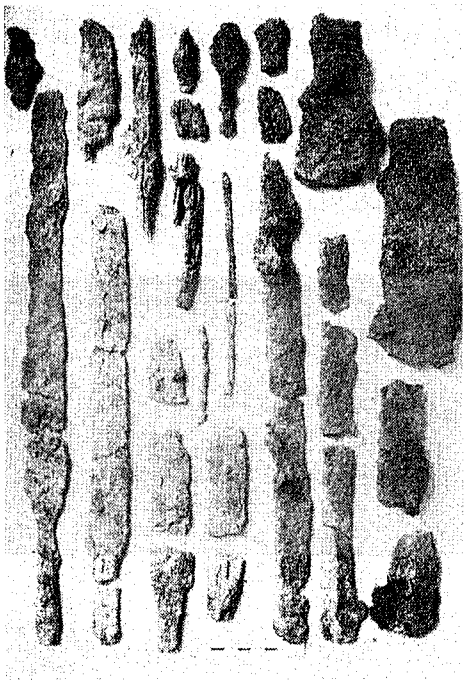
後円墳頂作業休止、東の燈台を望む

後円墳頂から南に見える今治旧市内

前方部二段築成露出作業

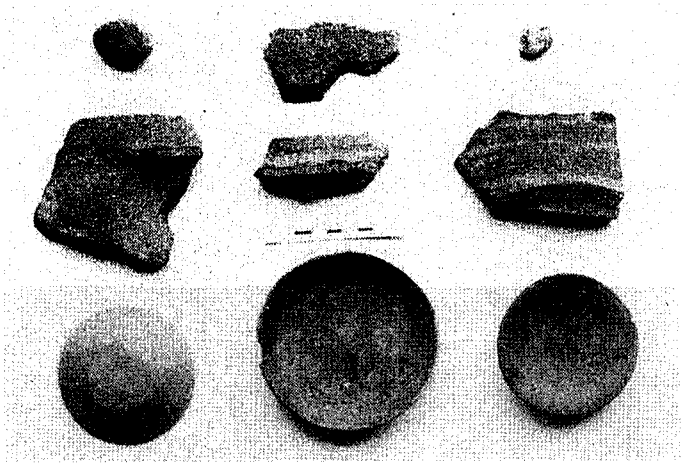


前方部東側の上段葺石（C′トレンチ）



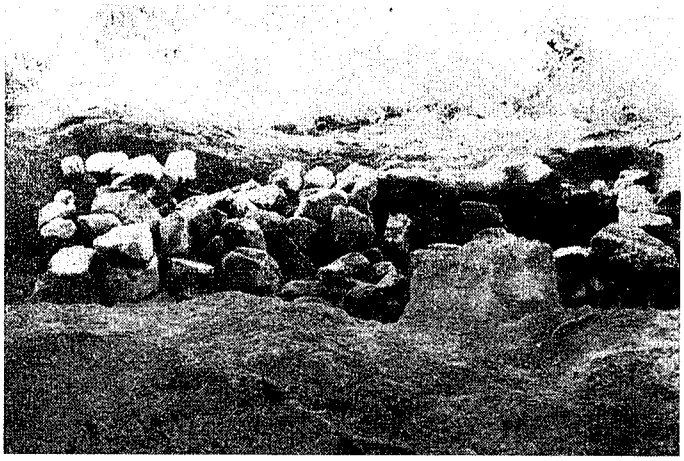
整理遺物の一部（石室出土）

上段左より
　小刀子２、鉄のみ１、その他
右上端　袋付鉄斧、その右下　鉄斧
下段左より４列（太い方）
　鉄剣とその折損品
その右２列　折損じた鉄刀
右下端　鉄斧片？
その上　鉄刀片？
中央　細長い鉄器やりがんな？

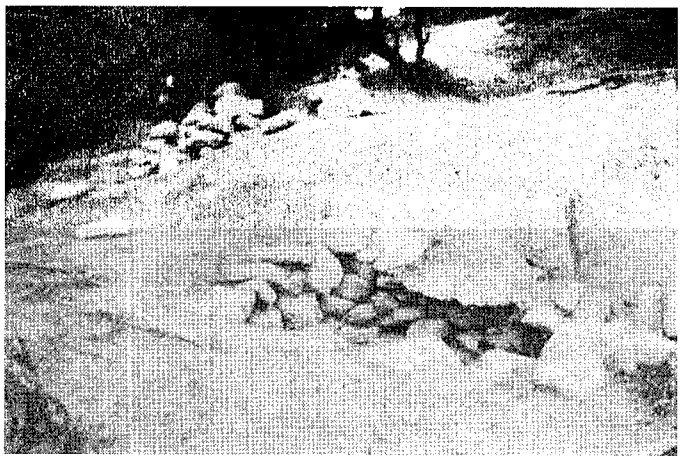


石室内の敷石砂利２、板石破片１（上段）
周辺出土のハニワ片３、土師器３（下段）
（中段右端朝顔形ハニワ片）

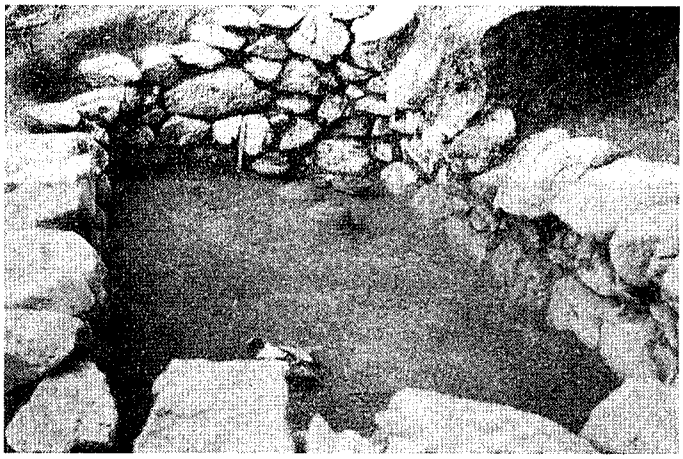
相之谷古墳の東山麓にある（一―一号）壊廃古墳の整掃状況



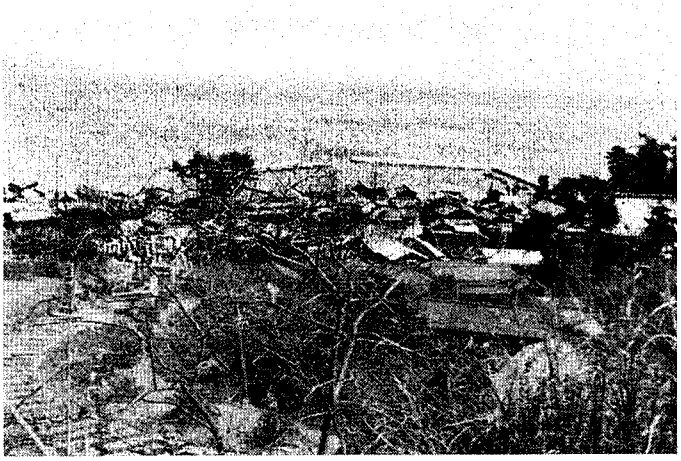
山麓上より東面して見る



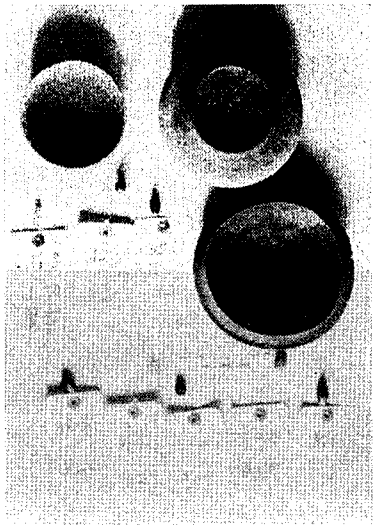
山裾より西面して



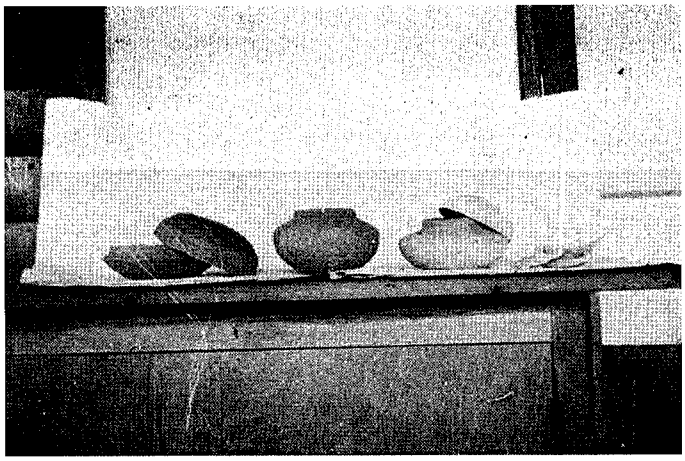
北の閉口部より南面して



壊廃した横穴式古墳から見える港地区



同墳出土の須恵器と玉類



昭和四十一年三月三十一日 発行

【相の谷古墳発掘調査報告書】

発行・愛媛県教育委員会

印刷・株式会社関洋紙店印刷所

松山市湊町七丁目七番地一